

たとえば、木浦では1907年頃から、会員相互の親睦のために、青年を中心に店員談話会が組織され、1915年に木浦青年会へと改編された。一時会員数は50名余りに達したが、1918年に指導者がよそへ引っ越したために解散に至ったという<sup>13</sup>。また、仁川では1910年に仁川地方法院判事大谷信夫・茂木和三郎およびキリスト教信者の発起で、仁川基督教青年会が組織された。その趣旨は、会員相互の親睦を深め、キリスト教精神のために知育・徳育・体育を増進するというものだった。1911年、会員数は100余名に達した。1913年には会館を新築し、講演会を随時開くことができるようになり、また仁川文庫を開設し、テニスコートおよび大弓場など各種の体育施設も整え、職業斡旋も行うようになった<sup>14</sup>。

このように在朝日本人青年会が1910年代に何カ所か設立されたものの、本格化するのには1920年代に入ってからのことである。京城府の場合、1920年代に入り、28の日本人青年会が主に町単位で設立され、その連合団体として京城府連合青年団が1925年につくられた<sup>15</sup>。仁川府でも1925年および26年に五つの青年団が結成され、1927年には仁川府連合青年団が結成された。この後も青年団は増え続け、1931年には連合青年団に加盟する青年団の総数は9になった<sup>16</sup>。在朝日本人青年団が本格的に設立されたのが1920年代以降であることを考えると、在朝日本人青年団が1919年以後の朝鮮人による青年会設立に与えた影響は限定的だったといえるだろう。

日本の青年運動が朝鮮に影響を及ぼしたとするなら、それは在朝日本人青年団よりも日本に留学していた朝鮮人の見聞を通してであったと考えられる。1920年代末、朝鮮青年会連合会をつくる際、主導的役割を果たした者には日本留学経験者が多く、後述するように留学経験者が中心となって発刊していた『東亜日報』は、青年会運動を積極的に宣伝していた。1922年の同紙社説を見ると、「日本やその他の国々の青年団が村落ごと村ごと里ごとに普及しほとんどクモの網状になっている状態」だと紹介している<sup>18</sup>。

## (2) 三・一運動以前の朝鮮人青年運動

三・一運動後、朝鮮で青年会運動が爆発的に起こった背景として、三・一運動以前の朝鮮人青年運動も考えておくべきだろう。すなわち、韓末に展開した漢城基督教青年会運動(YMCA)とエプワース青年会運動〔訳者注：Epworth Leagueは監理教の会派〕、安昌浩が主導した青年学友会、そして極めてまれな例ではあったが1910年代の朝鮮人青年会の結成などを考慮する必要がある。

漢城基督教青年会は、1903年に韓国でのYMCA設立のため米国から派遣されたジレット(P. L. Gillett)、監理教宣教師ハルバート(H. B. Hulbert)、カナダ宣教師ゲイル(J. S. Gale)らの主導で創設された。創立当初の理事を見ると、韓国人2名、米国人5名、英国

13 木浦府編刊『木浦府史』(1930年)523～534頁。

14 仁川府編刊『仁川府史』(1933年)1468～1469頁。

15 『大京城』(朝鮮毎日新聞社、1930年)322～324頁。

16 前掲『仁川府史』1462～1464頁。

17 たとえば安廓・張徳秀・金翰・金明植・朴一秉などは留学生出身である。

18 『東亜日報』1922年12月1日、「조선 청년 연합회 2주년 기념 —— 使命의 前途와 현재의 곤란」。

人3名、カナダ人2名、日本人1名だった。韓国人で参加したのは呂炳鉉と金弼秀だった。<sup>19</sup>

漢城基督教青年会（以下、YMCA）は宗教活動を最も重視していたが、青年層を対象とした運動だったので教育にもかなり力を入れた。そのためYMCAは学館をつくり、学生を募って夜学教育を行った。学館は、普通科・語学科・工業科・商業科・夜学科などに分けて学生を募集し教育したが、特に実業教育に注力した。<sup>20</sup>その一方、1907年1月の月例会では、李商在がYMCAの目的を徳育・体育・智育・交際に置くことを明らかにしている。<sup>21</sup>また、崔炳憲牧師は、「我々基督教青年会は道徳を礎石とし、智育と体育を本源とし、頑固な習慣と浮虚な学問をすべて捨て去り、敬天愛人の心で真徳・真智・真心・真品を尊び、新世界の風潮の文明学術を研究し」立派な青年を育てると、会の目的について述べている。また、YMCAが発刊する『青年学報』に掲載された文章も、青年の知徳体の側面において全き人格を備えられるよう青年を正しく導くことに青年会の使命があると、強調していた。<sup>22</sup>

YMCAの目的は上記のごとくであり、その傘下に宗教部・運動部・親接部・教育部を置き、活動を繰り広げた。宗教部は主に福音会を開催し、運動部は体育運動と遊技を主に教え、親接部は各宗の親睦・修養のための集まり（討論会・英語文学会・写経会など）を主催して活動を進め、教育部では、前述した学館を設置し教育を行った。<sup>24</sup>

1910年代以後も、YMCA活動の目標は変わらなかった。1914年に採択された憲章には、宗教活動以外の事業目標として「青年の知徳体および社交を通じて幸福を高めること」が含まれている。<sup>25</sup>1910年代の『毎日申報』には、YMCAが主催したさまざまな講演会と運動会・音楽会・幻灯会などについての記事が載っている。<sup>26</sup>

他方、1910年代には、YMCA以外にもエプワース青年会というキリスト教青年団体が存在した。エプワース青年会の創立は、YMCAよりも早い1897年で、もともと監理教の青年団体だった。「青年」という言葉もYMCAに先んじてエプワース青年会によって使われた。<sup>27</sup>韓国監理教宣教師は、1897年5月、エプワース青年会の中央組織を結成した。その後、個別教会組織として、仁川の内里（済物浦）教会・ソウルの尚洞教会・平壤の南山

19 서울 YMCA 編『서울 YMCA 운동사 1903-1993』（路出版、1993年）86～87頁。理事陣の職業を見ると、教師が2名、宣教師が8名、銀行家1名、政府顧問1名、聖書公会総務1名、そして幹事1名となっている。教派については、長老教5名、監理教3名、聖公会1名、不明4名である。

20 同上、102頁。

21 同上、118頁。

22 『大韓毎日申報』1907年11月20日、「青年会는 富国の 起源」。

23 李基勲、前掲論文、65～66頁。

24 同上、132～133頁。

25 同上、173頁。

26 たとえば『毎日申報』1910年11月9日付「青年会 演説」では、李承晩が教育に関する講演をしたという記事が載っている。しかし、その後の講演では宗教問題にテーマが限定され、その回数も極めて少ない。他方、1915年5月8日付「青年会 春季運動」では運動会の記事が、1914年12月3日付「청년회의 환등회」では、パリとロンドンを紹介する記事が、1914年10月4日付「青年会の 音楽会」では音楽会の記事が載っている。

27 趙利済「한국엠티청년회의 창립경위와 초기활동」(『한국기독교와 역사』第8号、1998年)80頁。

峴教会・ソウル貞洞教会などでエプワース青年会が結成された。このうち、特に尚洞教会エプワース青年会には全德基・鄭淳萬・朴容萬・李承晩・南宮憶・李東輝・李儒・李東寧・曹成煥など、後に独立運動を率いる人物がこぞって参加していた。<sup>28</sup>

エプワース青年会は宣教活動・啓蒙活動・民族運動などを展開した。宣教活動としては、討論会および伝道活動が行われた。また啓蒙活動としては、勤労思想の鼓吹・ハングルの奨励・健全な生活の勧め・自立精神の鼓吹・女性の意識啓蒙などを目的に討論会を開き、会報を発行している。民族運動については、特に尚洞青年会が中心となり1905年乙巳保護条約に反対する運動を繰り広げた。このように、エプワース青年会の運動が政治的運動にまでいたると、宣教師側は1906年に同会の解散を決定した。<sup>29</sup>

しかし、エプワース青年会は、1915年に個別教会のレベルで復活したとみられる。1915年、ソウルの宗橋礼拝堂内エプワース青年会は、崔南善・孫貞道らを講師として呼び講演会を開いている。<sup>30</sup>1916年には春川のキリスト教会内のエプワース青年会で討論会が開かれており、同年論山礼拝堂でもエプワース青年会が組織され講演会と討論会が開催された。<sup>31</sup>1918年には仁川内里教会で再びエプワース青年会が組織され、講演会などを開いている。<sup>32</sup>

他方、宗教系青年会以外のものとしては、1909年に安昌浩が組織した青年学友会も注目されてよい。青年学友会に関わったのは崔南善・尹致昊・張膺震・崔光玉らであるが、彼らはいずれも西欧や日本に留学した経験を持つ。彼らは青年を国家と社会の維新を成し遂げる主体と捉え、青年団体を組織し、まず精神的に青年を鍛える必要があると考えた。これに従って、彼らは青年学友会を組織し、その目的を「青年学友を糾合し、徳・智・体の三育を研究・実践し、健全な人物を育成すること」に置いていた。それゆえに、青年学友会は、青年が自らの知識と徳性を養う「一大精神圏」と見なされた。しかし、このような青年学友会は1910年代初めに新民会事件とともに解散させられてしまう。<sup>33</sup>

1910年代に入ると、性格は多少異なるものの、朝鮮人による青年会も一部には存在したようである。たとえば、1913年には平南徳川で徳川公立普通学校校長が中心となり、卒業生の善導のために、郡守を会長に据えた青年会が組織されたという。また、慶南馬山では、1918年に馬山府尹と警察署長が中心になって朝鮮人青年会をつくった。<sup>34</sup>このような青年会は、官吏が中心となり、朝鮮人青年を善導する目的で組織されたものだった。<sup>35</sup>

その一方で、平安南道鎮南浦では1914年に三和青年会が設立され、講習会・講演会・体育会などが主催された。<sup>36</sup>鎮南浦で1918年に李鍾驥・林敦夏など3、4人が中心となって

28 同上、87～91頁。

29 同上、95～107頁。

30 『毎日申報』1915年6月24日、「엠티청년회 강연」、1915年11月26日、「엠티청년회 강연」。

31 『毎日申報』1916年9月14日、「엠티청년회 토론회」1916年9月19日、「論山에서 青年会組織」。

32 『毎日申報』1918年12月15日、「인천 엠티청년회 강연」、1918年12月17日、「仁川青年会 総会」。

33 李基勲、前掲論文、54～56頁。

34 『毎日申報』1913年2月16日、「青年会 組織」。

35 『毎日申報』1918年6月12日、「馬山青年会 設立」、1918年7月19日、「馬山青年会의 發会式」。

36 『東亞日報』1920年5月14日、「三和青年会 復活」。

青年会を組織したという新聞記事があるが、エプワース青年会の可能性もある<sup>37</sup>。また、黄海道載寧でも青年の矯風を目的に載寧青年修養会がつくられた<sup>38</sup>。全北の金堤でも1918年に金堤青年俱樂部が組織された<sup>39</sup>。だが、これら数少ない青年会は活動もさほど活発ではなく、やがて財政困難に陥ったりしてうやむやになってしまう。

以上、韓末から1910年代までのYMCA・エプワース青年会・青年学友会・一般の朝鮮人青年会を概観した。これらの青年団体はおおむね、その目的を教育と修養・風俗改良・意識啓蒙などに置いており、その目的を達成するために講演会や討論会・運動会などの事業を展開していた。1918年までのこのような青年運動は、1919年の三・一運動以後雨後の筈のように誕生した青年会の運動目標や運動方法に相当の影響を及ぼしたと考えられる。

## 2 三・一運動以後の青年会の組織様相

### (1) 1920年代初めの青年会の勃興

三・一運動で青年・学生層が先導的役割を果たしたことから、青年層に対する社会の期待が大きな高まりを見せた。すなわち、青年層はすでに1905年頃より新文明と近代世界の主役として注目されていたが<sup>40</sup>、三・一運動後には民族の将来を担う主体としてさらに脚光を浴びることになったのである<sup>41</sup>。たとえば、『東亜日報』に掲載された金濫植の「青年の使命」という一文では、「国家や民族の隆盛と政治の適否、教育の振興はすべて青年の双肩にかかっているといわざるを得ない。それゆえに青年の行為と思想は必ずや国家や民族の中心とならねばならない。すなわち民族の中堅、これが我ら青年の使命だ」と述べている。そして、この一文では、青年のなすべき仕事として、政治思想の提起・産業の振興・科学の研究・道徳の研究・宗教の改革・教育の普及などを挙げている<sup>42</sup>。

このような折、三・一運動の收拾のために新たに朝鮮に赴任した斎藤実総督は、いわゆる「文化政治」を標榜した。「文化政治」とは、一方では言論・出版・集会・結社の自由をある程度許しながらも、もう一方ではこれを厳しく統制するという統治方式であった。しかし、一定の自由が許容されると、新教育を受けた青年の間に、「文化向上」と「実力養成」を唱える、いわゆる「文化運動」が起こった。そして、このような文化運動を推進する主体として、青年会が雨後の筈のように全国各地で現れた。当時の日帝支配当局としては、青年会の急激な勃興について、「当局ニ於テ或程度迄言論集会ノ自由ヲ寛容シタルト一面ニ於テハ青年カ朝鮮独立ノ不可ナルコヲ悟ルト同時ニ假令一視同仁ノ聖世ニ処シテモ実力ヲ養成セスハ容易ニ文化ノ向上ヲ達成シ能ハサルヲ自覚シタル結果ニ外ナラス」

37 『毎日申報』1918年3月14日、「鎮南浦에서 青年会 組織」。

38 『東亜日報』1920年5月15日、「載寧青年会 組織」。

39 『東亜日報』1920年5月23日、「金堤青年会 発起総会」。

40 李基勲、前掲論文、38～39頁。

41 安建鎬、前掲論文、56～57頁。

42 『東亜日報』1920年6月21日、「청년의 사명」(金濫植)。